

広島俳句倶楽部

令和二年三月作品集

オペラ「松風」

亜矢

オペラ「松風」は、広島出身の世界的作曲家、細川俊夫の作品である。この作品は、日本の芸能「能」を基に作り上げられた。このたび、広島で初めて能舞台で上演され、深遠な生と死の世界に、掛りしれないほどの感動を覚えた。（「松風」作曲 細川俊夫、台本 ハンナ・デュブデン）

全身で指揮をしてゐる二月かな

春寒し舞台真中に裸の松

泣いてゐるやうなチエロの青春浅し

小刻みに弓の動ける余寒かな

橋がかりをうつむき歩く春給

春灯ソプラノ歌手の細き指

早春のソプラノ響く能舞台

しなやかな指の指揮振り梅二月

赤き紐首に僧去る浅き春

春水の落つる音してオペラ果つ

佐保光俊

遠山に雪降つてゐる大榎
雪積んで人声のよく通りたる

村上正人

初雪の車窓に触れて消えにけり
新聞を取る手に雪の降りかかる

あざみ

山荘の耳聴くなる雪の夜
雪の駅回送電車耿々と

亜矢

春の雪玄関先に赤子抱き
自転車に並ぶ自転車春の雪

敬子

雪の舞ふ空を朝日の昇りけり
山里の屋根にうつすら雪積もる

暁子

沈む日に染まりて降れり牡丹雪
春の雪つぎの駅には雨となり

高尾ひとみ

夜の雪垣根の上に積もりけり
雪薄く積もりて朝日昇りたる

ちどり

雪道の靴跡に靴重ね行く
ふるさとの雪に寝ころび空を見る

松本恵和

冠雪の朝日を受けて輝けり
雪間へと続く獣の足の跡

美耶

うすうすと遠山に雪積もりけり
窓の外雪ちらついて消えにけり

阿姐

雪舞ふや藩邸跡の石の橋

井藤希

目の覚めて窓の明るき夜半の雪

英一

風止みて真つ直ぐに雪降り積もる

栄吉

植込みの雪幽かなり朝ぼらけ

遠藤さつき

備北路の路肩に雪の残りをり

大橋博子

雪の降る気配に真夜を目覚めたる

大畑恵

雪の朝恐る恐るに猫歩く

紀英子

嫁ぎ来てすぐ豪雪となりけり

熊谷ゆり子

雪の降る暗さにありて地の白き

桑門わかこ

外灯の照らして雪の激しさよ

白神陽子

雪の庭異国に目覚めたるごとし

民

雨樋を雪解け水の溢れたる

友岡崇山子

初雪のふんはり舞うてすつと消え

樵子

門柱に積もりて雪の白さかな

ふじ女

左から雪の結晶溶けはじむ

穂高

新聞を配る足跡雪の朝

松田裕子

夕暮の雨から雪に変はりけり

幹

初雪の遅れ報ずるニュースかな

みさ子

石段の長さ手摺に雪積もる

宮田保江

降る雪に父の生まれし地を思ふ

森口良樹

庭下駄の鼻緒に積もり今朝の雪

やす保

朝ぼらけ屋根に初雪残りをり

大川に降りつづきをり寒の雨

蔵の戸の雪に開いてありにけり

水仙に山からの風よく通ふ

きさらぎの日向日陰を歩きけり

白梅を下れば人のなつかしき

梅林の奥に赤子の声のして

朝となく昼となく梅香りけり

春霞山はゆふべの雨に濡れ

雲多きままに暮れたる桃の花

三月の空いつまでも暮れてゆく

佐保光俊

春暖炉木つ端の薪を焼べてをり

坂道に自転車漕ぐ遅日かな

船に乗る人を見てをり水温む

水音の聞こえてゐる春の園

春の野を足元見つ歩きたる

沈丁の香りに気づく帰り道

はくれんの咲きたる街路歩きたり

内裏雛飾られてをる喫茶店

群青の空に昇りて春の月

春の雲ばかりばかりと浮いてをり

村上正人

かいつぶり水輪を残し潜りけり

風光る上げ潮に立つ鶯一羽

長靴の跡の深さよ春の泥

ばちばちと草焼く畑に昼の月

しやばん玉飛ばす幼の真顔かな

樂しげに熅の作る紙雛

山里に日の移りゆく牡丹の芽

春風や貝拾ふ手に波の寄せ

春眠のはしいままなり里帰り

のどけしや散歩の犬に引つ張られ

あざみ

節分の豆を並べて数へたる

早春や父と子文を読み合うて

教室で親子輪となる春日かな

如月や長く伸びたるアコーディオン

春の日の規則正しき太鼓の音

先生に合否を告げて雲雀東風

梅東風やドッジボールの球速く

階段の春塵に日の射してをり

次々と手で叩きたるしやばん玉

玄関の薄きサボテン春の朝

亜矢

父と子の四方山話春炬燵

春北風に向かひ自転車漕ぎにけり

右肩の痛み和らぎ二月尽

日に向いてひしめき合うて節分草

ひざまづき節分草を見てゐたり

壺焼の渦まき光のみどり濃し

小流れに母と屈みて芹を摘む

花こぶし遙かに見ゆる安芸小富士

川べりの桜一輪咲きにけり

紫陽花の芽に細やかな雨の降る

敬子

自転車を土手まで漕いで水温む

青き踏む水音近きところまで

丸木橋渡りて手折る猫柳

草は萌え魚籠には鮒の暴れをり

鼓草岬の道は日に満ちて

谷からの風に揺れけり榛の花

松風の届く石蓐を採りにけり

宵からの雨となりたる雛の家

春光のコートにラリ―続きたる

体育館の床に動かぬ春の蠅

暁子

さまざまの木の芽の中を歩きけり

少年の駆け下りてくる春の山

春霞やんで広がる青い空

社へと馬酔木の咲ける坂を下り

川べりに立って見てゐる初桜

桜草夕べの庭を明るうす

ムスカリを数へてゐる朝の庭

はくれんに三月の日のよくあたる

川べりに零るるごとく椿咲く

三極の一つ一つに春の雪

切干を二階の部屋に広げ干す

一斉に野焼の火種放ちたる

川土手を這ふやうに来る野焼の火

村中に野焼の煙広がりに

菱餅を父のごとくに押し切りぬ

鶯や朝の味噌汁作るとき

大曲りの光はふるさと花菜風

母が家の前の菜の花明りかな

母が家のリビングにある内裏籬

朧月水車の回る音のして

かさかさの枯葉の中に芽吹きたる

飛び跳ねて春の霞の白さかな

沈丁に傘触れたれば匂ひけり

すぐそこの藪に鶯来て鳴けり

春大根軍手のままに渡さるる

春の月送別会の帰りかな

足元を照らしてゐる春の月

啓蟄やいつの間にやら雨の降り

囀の林の中を通り抜け

田起しに鶉二三羽降りて来し

高尾ひとみ

ちどり

松本恵和

初雪の地に着くまでに消えにけり
雪積もり遠き山々近く見ゆ

山門の紅白の梅咲き揃ふ

背伸びして子の手の先のしだれ梅

梅の香の角を曲りて人の来る

沿道の木々の光より芽吹きたる

春の雪海辺の窓に積もりたる

山中に日のあたりゐる辛夷かな

朝霞船の汽笛の高きかな

紫木蓮寺の塀より高く咲く

美耶

真夜覚めて高く掛かれる冬の月

外に出て雪の匂を吸ひにけり

美しき指持つ人と雪を見る

寒明のスカーフ小さく結びたる

満開の梅園の雨降りやまず

終日の雨となりけり梅二月

客の来る雛の部屋をぬくめおく

沈丁や引越しの荷を造りをり

桑門わかこ

春風の通り抜けたる柳かな

竹に雛座らせてゐる城下町

ほのぼのと明けたる広野ひばり鳴く

春風に紙飛行機を飛ばしたる

嫁ぐ子と雛飾りたる一日かな

雛飾り雛の数をかぞへたる

蠟燭を灯し香焚く朧かな

穂高

名を知らぬ冬の葎の紅の濃き

三畝の畑に寒肥やりにけり

野呂山の曇りて里の雪近し

朝刊のこもりと落る雪明り

春暁の出帆の笛聞こえたる

山寺に苔の石段梅二月

大橋博子

春雨に煙つてゐたる瀬戸の島

赤子泣く声のごとくに恋の猫

どろんこの顔になりたる恋の猫

この雛と嫁入りしたと祖母の言ふ

菜畑の中の一畝葱坊主

母の忌を終へて見上ぐる春の月

友岡葉山子

着岸の汽笛の聞こえ春霞

対岸にホルン吹きをり春の宵

校門の両脇に植ゑクロッカス

蝌蚪の紐ついてゐたる下校の子

テンカラを流してをれば初音せり

大空を覆つてゐたる桜かな

森口良樹

春の雪藩邸跡の橋に積む

雪割草生家の跡に来てみれば

すかんばを噛めり捨田となりし畦

引き揚げて独り承らふ春夕焼

鶯や夫の墓所を訪ひし時

阿姫

庄雪にブーツで立てり交差点

風吹いて渦となりたる落葉かな

梅林の端に立ちたる枝垂梅

ぜんざいを食うたる店の椿かな

雨の日の花の蕾を見上げたる

井藤希

山近く近江の国の田を打てり

雨やみて低き雲より春の山

紅梅のしとどに濡れて雨上り

鳥の影囀るたびに移りたる

春の雨じつとしてゐる鳩の群

栄吉

冬空に爆音響く艦載機

湯豆腐の踊つてゐたる一人の餉

溜池の細波立ちて春の風

寒椿紅そのままに散りにけり

野の草の匂の中に蛸蚪生まる

初蝶の上へ下へと飛びにけり

梅の香の枯山水に漂うて

少年の掌の上蛸蚪泳ぐ

風下へ浣丁の香の広がりぬ

白波の鳥居に寄せて春嵐

あたたかき一日となりぬ蛸蚪は群れ

ベッドから母の見てゐる雛かな

朝霧の岩国城の浮かびけり

寄せ植ゑに大犬ふぐり添へてあり

欄干に釣竿二本春の朝

大畑恵

白神陽子

撫子

大試験終わりし家の灯りかな

休校の教科書積んで春炬燵

バンパ―の疵を見ている春の雨

野遊びの道に鞆の並びたる

山笑う鬼ごっこして陸上部

ふじ女

春一番橋の真ん中歩きけり

囀のよく聞こえたる雨の後

朝の日の差し込んでゐる雛の間

連翹の明るき道を帰りけり

屋台からソースの匂ひ花の宴

松田裕子

墓参る病の癒えた春であり

花辛夷実家の跡に立ちにけり

赤椿一つ二つと落ちにけり

耕して上に穀殻撒いてをり

チューリップ覗く蕾の色淡し

宮田保江

磯遊び雑魚エビ跳ねる潮溜り

紅梅へ一陣の風賑々し

雲一つなき山に春疾風かな

鶯の声を残して枝渡る

英一

参道に水仙ひらくうれしさよ

指先に香りの滲む露の臺

鶯の初音を聞いて朝の道

まんさくの住む人のなき庭に咲く

紀英子

休校の子ら鬼ごっこ春の風

飛行機の枝垂桜の中に消ゆ

春時雨小枝に雨滴残りたる

島に行き鯉が釣れたとメールあり

ちかこ

水温むボサノバかける厨かな

ていねいに雛の簪納めたる

路地裏に子の声のして春の風

石段に座り想へる春の昼

やす保

春の空綿菓子のごと雲うごく

春風に洗濯物のひらひらと

春の空童謡歌ふ少女かな

阿波久

縁側に動く鳥影春障子

はるばると訪ねし町の雛かな

卒業子小さきブーケを抱いてゆく

遠藤さつき

滑らかに水の流るる春の滝

家を解く大きな鉄花なづな

初花と告げる人ありお濠端

熊谷ゆり子

坑道を流れ出し水蛭蚪生まる

枝先の梅のふくら咲きにけり

落椿並べてありぬ井戸の縁

新庄憲彦

旧道の商家の座敷雛かざる

燕の子口全開に餌をせがむ

はくれんの咲く校庭に声がなく

民

春風に球場の声混ざりをり

春の風ヒールの靴を履いてゆく

いつになく遠くへ散歩春の風

みさ子

水槽の魚に春の日があたり

風切つて自転車を漕ぐ春の昼

かこ

メガネとり静かにホットココア飲む

人住まぬ家に白木蓮の咲く

津田玲子